

ところは京都―天井の低い探光のにおいお茶屋の二階に友次郎さんが浴衣を着てキチンと座つてゐる、七十何年間座りつけた人の座つた型はよいからである、この座敷にも似合つてゐた。

病ひで友次郎さんは藝界から去つてはゐるがどう見ても藝道に達した人の姿で決してサンパツ屋の親爺や金貸の隠居には見えない。

師からお稽古の合間を一寸かりて話をさく、六十年の藝歴をもつ話には尊いものがあつた、技術的な話になるとワザ／＼三味線を持つて來さして不自由な手で弾いてくれた、一秒か二秒ではあつたが友次郎の音である。三味線を持つ師の姿を再び見ることを豫期しなかつたので、この時とばかりスケッチをするためにそのまゝの姿をお願ひしようと思つたが、私ほどうしても口に出なかつた、スケッチも諦めた。

中風で半身を奪はれ藝道に絶望的なものを感じた時の師の心境を「痛いところをふれては悪いかな」と思ひつゝ、恐る／＼うかゞづつて見る。

「中風になつて」舞臺に出られんのは別に何んとも思ひませんが、只情ないのはかうもあゝもと人に教へてあげたい時、どうしても口で云ひ現はせぬところがよくあります、その時コノ不自由な左の三本の指がうらめしいやうら腹が立つやうらで、涙が出ることもよくありました―友次郎さんの藝の意欲の強さが童顔を紅潮さす。



名家探訪面帖

その六 鶴澤友次郎

繪と文

藤原せいけん